

会 議 録

|                        |  |      |    |
|------------------------|--|------|----|
| 会 議 名                  | 第10回 第2次小金井市芸術文化振興計画策定委員会  |      |    |
| 事 務 局                  | 市民部 コミュニティ文化課  |      |    |
| 開 催 日 時                | 令和2年12月1日(火) 午後3時 - 午後5時   |      |    |
| 開 催 場 所                | オンライン会議ツール zoom を使った開催   |      |    |
| 出 席 委 員                | 大澤寅雄 委員長<br>伊藤裕夫 副委員長<br>小林勉 委員<br>水津由紀 委員<br>野澤佐知子 委員<br>福沢政雄 委員<br>桑谷哲男 委員<br>戸舘正史 委員<br>西村德行 委員<br>山村仁志 委員<br>中原和樹 委員   |      |    |
| 欠 席 委 員                | 小林真理 委員  |      |    |
| 事 務 局 員                | 1 事務局運営補助 特定非営利活動法人S Tスポット横浜<br>小川智紀、田中真実<br>2 小金井市<br>コミュニティ文化課長 鈴木遵矢<br>コミュニティ文化課専任主査 吉川まほろ<br>コミュニティ文化課主任 津端友佳理<br>コミュニティ文化課主事 小野智広<br>3 事業実施者 特定非営利活動法人アートフル・アクション<br>宮下美穂 |      |    |
| 傍 聴 の 可 否              | 可  |      |    |
| 傍聴不可・一部不可<br>の場合は、その理由 | 可  | 傍聴者数 | 0人 |
| 会 議 次 第                | 1. 新委員就任について<br>2. 計画の事務局草稿について<br>－事務局草稿をもとに計画の内容について議論を行う<br>3. その他<br>今後の進め方について (パブリックコメント等)<br>意見交換等  |      |    |
| 会 議 結 果                | 別紙のとおり   |      |    |
| 会 議 要 旨                | 別紙のとおり   |      |    |
| 提 出 資 料                | ・第2次小金井市芸術文化振興計画 事務局草稿   |      |    |

## (開会)

### 1. 新委員就任について

【大澤委員長】第2次小金井市芸術文化振興計画策定委員会は、本日10回目です。前回の委員会から間を置きました。最初に新しく就任した中原委員、自己紹介をお願いします。

【中原委員】今年の3月に引っ越したばかりで、東小金井に参りました。本職として、舞台の演出家・脚本家をしています。アート制作にも興味があります。市の広報を見て応募しました。途中からで、分からないことだらけですが、よろしくお願ひします。

十年前、小金井市とその付近の子どもたちを集め演劇ワークショップを3カ月ぐらい行ったのですが、僕は演出を担当しました。小金井市には来たことがなかったのですが、穏やかで住みやすく人間らしく過ごせるまちという印象がありました。

【大澤委員長】いい話を聞けました。芸術文化振興計画策定作業の中でも、理念として大事にしたい部分に共感してくださる気がしました。

### 2. 計画の事務局草稿について

#### －事務局草稿をもとに計画の内容について議論を行う

【大澤委員長】計画の事務局草案を基に議論を進めます。今日の委員会で意見を集約した計画案を、1月にパブリックコメントとして市民のみなさんから意見を聞くという段階になります。今日が実質、議論できる最後のチャンスと思った方がいいです。もう1回委員会は予定していますが、最後の委員会ではパブリックコメントを受けた皆さんの合意形成を得ることになります。お一人ずつ、意見を示してください。

【西村委員】教育のところを中心に見ました。教える・教えられるという、知っている人が知らない人に伝えるということだけではない取り組みを、市民に提案していくということが「6つの大事な視点」のに書いてあります。まさにこの通りで進めていただきたいです。素材はさまざまなものがありますので、どう教育とつなげて行くのかを考えることで、プログラムができていくのだろうと感じました。

【水津委員】私がこだわっていた担い手、コーディネーターが明記されていて分かりやすい表現になっていたのが良かったです。計画の担い手が市民であることをアピールしたいと思っていたので、その部分が文章化されているところも良かったです。計画ですから仕方ないのかもしれませんが、若干上から目線という印象が全体的にあるのが気になりました。

【戸舘委員】議論されて来たことが噛み砕かれ、ポイントを抑えてまとめられているという印象を持ちました。行政の計画等、理念では、「私たちが」という言い方をし

がちで、もちろんこの計画の中でもないことはないですが、市民全員が連帯して文化振興に邁進する必要なんて別にないのです。それぞれいろいろなレベルで恩恵を受けますが、そのひとりひとりの市民は、やりたければやったらいいし、やりたくなければやらなければいいという意味で「ひとりひとり」という表現が随所に入っていて、その存在を担保している表現も垣間見られるので、いいと思いました。

【大澤委員長】草案段階でやり取りがありました。「みんな」というか「ひとりひとり」というか、結構違うと思いました。「みんな」ということばを無自覚に言っているけれども、括っていいのだろうかというところもありました。「市民が担い手」の部分に出てくる「市民ひとりひとり」は「みんな」とは違うから、あえて選択したことばでした。

【小林勉委員】今まで議論して来たことが端的にまとめられていて、読みやすい文章でした。「トライ・アンド・エラー」の「試みながら学びあう」というのが重要で、ここが入ったのはいいと思いました。

【大澤委員長】こういう基本計画で「トライ・アンド・エラー」、試行錯誤という言葉を入れる例は多くありません。特徴的で小金井らしいと言えるかもしれないですね。

【山村委員】今まで出て来た意見、考え方、理念が反映されていて、その点はすごくいいなと思いました。

【福沢委員】小金井の今の実態をとらえていると感じました。いくつか気がついたことを断片的にお話します。

「時代への対応」では、東日本大震災やコロナが書いてありますが、これ以外に少子高齢化、働き方の改革、デジタル化時代への変化なども、文化や芸術にも影響しますから、そういった要素も書き込んだらどうでしょうか。

「芸術文化のとらえ方」ですが、現実をとらえる以上にそれをどうしようかというところまで書き込んであるものですから、書き方を変えた方がいいと感じました。「現実のとらえ方」の部分は、現実限定して書いておけばいいと思います。

計画のスケジュールですが、前期と後期とに分ける意味があるのだろうかと感じました。「後期では中間管理機能を持つ多様な分野の団体を」とありますが、ほかのところでは、中間支援機能は小金井の文化に不可欠、中間支援機能の充実、「中間支援機能を持った団体に対しては、この計画の実施に向けた積極的なかじ取りを任せる」と書いてあります。中間支援は前期は何も機能しないようにも受け取られるものです。分ける必要はないでしょう。

財源は「小金井市による十分な財政措置が不可欠である」と書いてあるんですけども、文化芸術基本法では地方自治体の責務と書いてあります。「不可欠」ではなく「責務」だと。強い感じがするんですけども、その方がいいでしょう。

それから、大学などの教育機関の記述がありますけど、財源とどう結びつくのか、この文言だけだとやや不明確だと感じました。

それから、基本的なことをお伺いしたいんですけど、推進委員会というのは条例でいう9条の2項の芸術文化振興推進機関というふうにとらえているのでしょうか。

【中原委員】前提として、小金井市芸術文化振興計画があって、そこから推進委員会がこの計画を基にさらに具体化して行き詳細なアクションに落とし込むみたいなイメージですね。推進委員会の段階なのか、この計画に盛り込む内容なのか存じ上げていないのですが「芸術文化を楽しむ」キーワードが並列なのか、それとも段階があるのか。どう具体化され実現されて行くのか分かりませんでした。優先順位とまでいいませんが、全部達成するのは難しいと思いますので、その辺りが気になりました。

【伊藤委員】副委員長として、事前に進行過程を見て意見も言って来ました。全体的には非常にいい形でまとまっているが、やや頭でっかちという印象を持ちます。中原委員が指摘したように、この計画がどのような形で実現して行くのかという問題が、見えて来ないところが結構あるのです。福沢委員の指摘部分とも関連します。行政の計画は、かつては行政をしばるものでした。行政の担当部署が市民なり有識者も入った委員会でもとめるものです。最終的には市民の声を聞くもので、行政がこの計画に基づいてこれから先こういった形で文化振興を計って行きます、ということ述べたものです。

21世紀になってこうした行政計画の性格が少しずつ変わって来ています。まちづくりや文化もそうですが、市民生活に関わる行政活動は、かつてのように行政の担当部署が頑張るだけではできなくなって来た。特に文化の世界は、実際に文化を作って行く担い手は行政では全くない。行政がいくら頑張っても文化なんて作れっこないのです。市民であったり、市民の中のさまざまな文化活動をしている人たちであったり、あるいは活動していなくても生活の中に取り込んで行ったり、自分も一部お手伝いしたり、参加したりしている人たち。こういった人たちが欠かせないということが分かって、市民とともに進めて行くための計画に変化して来ていると思います。小金井市の計画は、他の都市に比べると市民色を強くしてまとめて行ったと思うわけです。しかし「具体的な計画」では、この計画に基づいて行政は何をすべきかが書かれてないというのが率直な印象です。この辺を少し詰めなければいけないと、事務局との打ち合わせでも言いました。ただ、その辺の議論を今までしていなかったのですね。したがって合意形成されていないままに、行政にこうしろと言うのはちょっと変だなという感じもして、そのため僕がアドバイスして作ったのが、前期・後期に分けようという考え方なのです。

実際、この推進委員会がどこまで機能できるかどうか分かりません。前回の計画では結局立ち上がらなくて動かなかったのですが、今回は必ずこれを立ち上げ、推進委員会の中でこの計画に基づいて、行政に新たにこういったことをやったらどうかとか、あるいは時代の変化を踏まえてこういったことを一緒にやっとうよということ推進委員会の方で議論し、必要なものは毎年の行政の予算措置につなげていく。予算案が要らないものもいっぱいあります。あるいはむしろ、市民が中心となって動いて行くために、中間支援組織が立てた計画を行政が後押して行く。政策形成だけではなくて、やりやすい環境を作っとうよという方向もあります。そのためには、例えば文化担当セクションだけではできない問題もあります。教育委員会だとか、あるい

は他の産業や市民生活に関わる部署との連携だとか、他の自治体との連携だとかが必要になって来る。財源については責務としてきちんと作ろうと書いた方がいいのでしょうけれども、あまり書ききれなかったのが正直なところです。この辺は今後どのような形でこの計画を動かして行くかというところで補強して行く必要があります。後半に関していうと、今後の推進委員会に投げてしまう形の計画になっている感じは否めないのですけれども、前半の頭でっかちは決して悪い意味ではなくて、理念として非常に先進的な理念をうたえている。今後実際に動かして行く仕組みが大事だと思いますので、計画ができて終わりというわけには絶対行かないわけですね。

【桑谷委員】確認したいことがあります。「文化芸術基本法では、社会包摂として子どもに対する芸術文化」とありますが、社会包摂ということばは文化芸術基本法で使用されていないのではないのでしょうか。初めて使われた例は、2011年の文化芸術に関する基本的な方針が初めてではないかと思います。社会包摂の排除する側と排除される側、区別する側と区別される側についてです。排除される側のことについては丁寧に書かれているのですけれども、排除する側について書かれていないので、後から詳しく検討してみたいです。

【事務局・小川】そうです。包摂という文言自体は存在しません。理念としてはどこかに入っていたかと思うんですが、列挙で入っているんですよね。「障害の有無とか経済的な状況、または居住する地域に関わらず」は法律の中には入っていますが、それを説明する上で「社会的包摂」と言われているだけであって、確かに桑谷委員がおっしゃる通りです。修正を加えた方が良いでしょう。

【大澤委員長】本質的な問題というよりは、書き方の表現として誤解がないというか、「成文化された法律とちょっと違うんじゃないの？」という指摘を受け兼ねないので考えましょう。

【桑谷委員】計画期間の「2021年4月から2021年3月まで」ですが「2021年4月から2030年」になるのですよね。

【大澤委員長】本当だ。事務局が土下座をして謝っております。すみません。さて、草案の流れに沿って、もう1回ご意見をいただいたポイントを振り返りながら、議論をしていきます。福沢委員からご指摘いただいたポイントが多いのですが、まず「芸術文化のとらえ方」。この中で文体として「取り扱って行きます」「見だして行きます」と未来形のような表現があります。このままの形で表現していかどうかという意見でした。私は小金井の芸術文化を形作る重要な存在として広くとらえて取り扱っているという現在と、これからもそうだという現在進行形みたいな書きぶりとして解釈していいと思うのですが、いかがでしょうか。

【伊藤委員】ここも「文化的土壌」の章に入れるのは違和感があるので、むしろ、最初の第1章に入れた方がいいのではないかと考えました。文化芸術のとらえ方と、今後このようにとらえましょうという次への提案、つまり第3章で述べて行く部分とに

またがった書き方をしているのです。そういう意味で「行きます」という書き方は、これから先の計画の中で加えて行こうという1つの流れです。

それから、第1次計画から継承したものがいくつかあります。これは土壌として定着したと言えます。例えば「10のキーワード」。先ほどこれはどういう順番で行くのかという話がありましたが、これは第1次の計画、現行の計画に書かれていたものなのです。これをきちんと継承して行きたいです。「こういった考え方が小金井市においては定着して来ているので、継承して行きたいと思います。」という意味では、これはまさに土壌なのです。土壌の部分と、次の3章における本計画の考え方として、「今度の新計画の中でこういう形で芸術文化の考え方を発展させて行きます」という部分が入り混じっているのが誤解を与える要素になっているのかもしれませんが、したがって、もう一度事務局の方で丁寧に読み直してみて、部分的に移動して行く必要があるという気がします。

【大澤委員長】他にご意見がなければ、伊藤委員の意見の方向で、事務局と委員長も含めて位置づけを整理します。

次に、福沢委員のご意見で「時代への対応」の部分ですね。少子高齢化、あるいは働き方改革、デジタル化社会といった変化についても、時代への対応として謳っているのではないかというご意見です。

【中原委員】「時代への対応」は小金井市に限らないものです。小金井市の文化的土壌というところに係れていることに違和感があります。それは、日本全体の文化芸術や地域活動、すべてに共通な問題だととらえています。少子高齢化などの社会情勢を織り交ぜると、第1章に入るべきだと思いました。

【大澤委員長】確かに「時代への対応」は第1章より、この2020年からの計画の前提としてとらえていいのではないかなと思いますが、いかがでしょう。

【伊藤委員】これまで10年間計画を進めて来る中で、小金井的な芸術文化のとらえ方というものが定着して来ている。それを踏まえて、もしここに入れるとしたら「今後、文化的土壌をどのような方向に耕して行くのか」というような書き方で、時代への対応が1つの柱になって行きます。芸術文化のとらえ方も拡大して行きます。それから、市民との関係が入って来るといった形で整理をして行くといいのかなという気はしました。そうすると、章を動かさなくても済むかもしれません。委員長と事務局で整理していただければと思います。

【戸舘委員】伊藤委員の意見に賛成です。福沢委員が指摘した、もう少し他の時代を表象するトピックも盛り込んだ方がいいというご意見は確かにごもっともなのですが、あえてここで東日本大震災、相模原事件、コロナの蔓延を入れたのは、事務局がこの3つを選んでいくという気がしています。昨今のこの10年ぐらいのアート、芸術文化のトピックというか、表現上のモチーフとして、カタストロフィやそれが招いた弱者の排除がトピックとしてあるので、あえてこれらを入れているのは、1つの形式としてある気はしました。あえてこの3つに限定しているということで、この計画

の考えている芸術文化のとらえ方みたいなものが鮮明になっているので、あえてこの3つに限定して書くという方法もあります。

【大澤委員長】この第2期の計画を作るにあたって、社会的包摂を全面に押し出そうとしたきっかけは相模原事件でもあったし、震災やコロナに直面したのもそうです。方向性が違う意見もありましたが、事務局と委員長で揉ませてください。芸術文化のとらえ方、土壌と、背景の部分を整理します。

続いて、中原委員が指摘した「10のキーワード」が並列なのか段階を追ってなのかというご意見は、伊藤委員の基本計画の内容がもっと具体的でもいいという意見と響き合うご指摘だったと思います。僕は「10のキーワード」は第1期の計画で使われていたもので、非常によくできたものだと思っていました。これに優先順位をつけられるかということになると、恐らく道筋がひとりひとり違うのではないかと。それを計画の中で「出会う」の次に「知る」というように一本道にするのは無理だろうし、何かしら体系的に表現するより、ひとりひとりの関わり方の違いに柔軟であってもいいという気がしています。ご意見はありますか。

【オブザーバー・宮下】今の計画には体系図があって、その理念が具体的に施策になるまでのガイドラインのような体系図があるのです。市民が担えというのなら、ビジョンを実現するための手立てとして、ある程度の幅を持って実現化するための体系図が欲しいです。具体的な計画の中の施策の方向性があるって、基本施策、事業の展開をブレイクダウンして行くようなガイドですね。

それから、時代の問題です。もちろん12年前から芸術文化は大切でしたが、より良い形で芸術文化を考える時だと、この困難な時代に私は思うのです。前書きなどで、なぜ芸術文化が必要なのか、何でこの計画が大事なのか、説得力を持って委員長が書き下ろしたらいいと思うのですが。市民の人が見ると「どうして芸術文化なの？」という疑問も出てくるでしょう。その時に、こういう状況の中で私たちは生きていて、出会うこと、知ることは生死に関わるものだという思いも伝えたいです。

【大澤委員長】「10のキーワード」は階層化・優先順位をつけず、このまま進めます。次にスケジュールを段階に分けるかどうか。10年の計画をスケジュール感なく記述するといつまでに何をやるのか見えないので、動かないということも考えられると思ったのです。また、コロナ禍があったことも大きいです。現在は、来年度の計画もままならない、書いた通りにできないのが実態だと思います。だから、ここはスケジュールの5年間を2つに分けて、コロナ禍後にどういう形で文化芸術事業が可能なのかを確認する作業が前期5年間かかるのではないかと思うのです。その先、どう展開して行くかを見極めて後期へ、という思いでした。

中間支援の言及が何度もある中で、早くやろうよという話でもありますが、もう1つの懸念は今回、はけの森美術館と交流センターの2つの公立文化施設がこの計画に位置付けられるということです。おそらく計画に位置付けて2つの文化施設が探りながら事業をすることになるでしょう。それを最初から「はい、あなたたちも中間支援をやってください」といっても、現場としては戸惑いが多いでしょう。

前期では、まず計画の推進主体として2つの公立文化施設がアートフル・アクション

に加え推進主体になる体制を作っていくことに注力する。もちろん他の中間支援も育ってほしいのですが、まず中核になる推進主体の中に2つの公立文化施設が乗って来るということに、重きを置いてはどうでしょうか。

【山村委員】事業の展開では、場所を作る、きっかけを作る、基盤を作る、人材を育成すると書いてありますが、アートフル・アクションとはけの森美術館、ホールが、全部展開するのは財政的にも大変です。スケジュールが具体的に必要だろうと思います。計画は具体的に書いた方がいいです。行政だけでは作れないけれども、市民が活躍する場所の枠組み、基盤を作るのは行政の役割です。具体的にはコミュニティ文化課や社会教育課が事業化しないとできないので、何らかの文言が入った方がいいと思います。

財源が必要なのは当然です。例えば、これははけの森、宮地楽器ホールがこう、アートフル・アクションがこの部分を担うといった事業展開として書いてもいい。

【大澤委員長】基本施策（事業の展開）にある事業ないし施策の展開について、担い手がどこなのかということを示した方がいいことですね。

【山村委員】はい。NPOであるアートフル・アクションと、指定管理者である宮地楽器ホールと、コミュニティ文化課が所管しているはけの森は性格が違うので、それを踏まえた書きぶりにした方がいいです。その上で6つの展開がどう整理されるのだろうと思いました。

【大澤委員】それぞれの組織体の性格やパートナーシップの関係性もそれぞれだから、書きぶりを揃えるのは難しそうだと思いますが、ほかの方はいかがでしょうか。

【伊藤委員】山村委員の指摘は重要です。僕も基本施策（事業の展開）は、もう少し具体的でないと弱い感じがします。その次にスケジュールがあります。基本施策の6本のうち、1番、2番、それから6番は、スケジュールで行くと前期にすぐスタートできる内容です。対して3、特に4、5は中間支援機能です。これらは徐々に力が発揮されて行くので、4、5はアートフル・アクションだけでなく、宮地楽器ホール、あるいは可能であればはけの森美術館も役割を担って行けるよう環境整備をし体制を作る方向で発展するのが分かるようにしたい。それがないと、具体的に何をして行くのかということが——ある面推進会議で議論しましょうという形で半分はあるのですけれど——しかし、推進会議で議論する取っ掛かりとなることまでは触れた方がいいと思います。

【事務局・鈴木課長】芸術文化の計画なので致し方ないと思いつつ、具体性に欠ける部分がある気がします。といっても、既存の事業、これからやってくる事業を明確に書き込むのも難しいというところがあり、悩ましいです。ただ、具体的な記述がある方が行政としてもやりやすいし、説明しやすいと思います。

【大澤委員長】書ける範囲がどのくらいなのかは探り合いながらですが「前期はこの



部分に重点をして行こう。後期はこの部分に重点を移行させよう。」という書き方でしたり、担い手はどこが核となって、あるいはどことどこが連携し展開していくのか。その辺りまでは書けそうな気がします。その辺を書き加える方向で事務局と委員長で調整するということがいかがでしょうか。

【伊藤委員】そのようにしてもらいたいです。その時に事務局と委員長と市で調整して欲しいです。1つは宮地楽器ホールの指定管理の業務の基準書、あるいは指定管理の計画書で何をやっていこうとしているのか書かれているはずですが。その辺を参考にしつつ、この計画に基づいてこういった方向を強化していこうと指摘するのがいい。つまり、まったく指定管理者が考えていないことを出してもできっこないのです。そういっても指定管理者に任せっぱなしなら、計画の意味がない。そういう意味で調整が必要になってきます。同じように、はげの森美術館も今後の展開の方針があると思いますので、学芸員の声も聞いて、こういった方向に持って行くべきだということがあれば可能な限りそれを書く。

それから前期において中心になるのは、現行計画のコアになって来たアートフル・アクションだと思います。前年度の計画に引き続き、こういった方向に進んで行きたいという考えがあれば出してもらい、1から6の柱に分類して入れて行き、この部分を前期で進めて行く、この部分は話し合いが足りないあるいはコロナの問題もあってまだ読めないから後期に回す、と整理すると具体的に見えて来るのではないのでしょうか。

その時は市や文化施設の文化事業を全部出して、基本施策の展開に使っても構わないと思います。あまり具体的に「やります」と書いてしまうときついで、「例えばこのようなことをやってみてはどうだろうか」という例示でも構いません。大変だと思いますが、新たに考えて行くよりも、市、ホール、美術館、アートフル・アクション4者が考えていることが、基本スケジュールの前期か後期か見えて来ます。体系とまでは行きませんが、今後の具体的なものとして示せるのではないのでしょうか。

【オブザーバー・宮下】美術館とホール、それ以外のさまざまな主体と、どう連携し役割分担をして行くかが重要です。さまざまな活動をしている主体は得意分野を持っているので、そういう方々と分担・協働することが、裾野を広げて行くことに繋がって行くので、協働のあり方と役割をはっきりさせることは大事です。例えば、私たちが小学校で実施して来たことを踏まえ、美術館の鑑賞教室としてお手伝いできることがあればうれしいです。

それから、中間支援のあり方を変えるべきです。何かを請け負い、中間的に役割を担い、先に行って支援する、という形態を変えなければ。支援という言い方も辛いですが。別に支援しているわけではないですし。協働のあり方の具体的なビジョンがあれば、——ビジョンも5年計画もない小さなNPO同士が、どうやって連携するか考えること自体が自治だと思うのです。

【事務局・小川】はげ美の長期計画は中で持っているわけですね。

【山村委員】運営委員会の提言は4年に1回出しています。前回は1年前に提言を出

しました。ホールは指定管理だから厳しいので、ちゃんとした調整が必要です。

【伊藤委員】福沢委員のNPOは、市内でさまざまな文化活動をしている団体との連携があると思いますので、そういう計画についても押さえた方がいいと思います。

【戸舘委員】推進委員会の役割について提案します。いろいろある推進委員会の役割のうち、実施主体の当事者、担い手、公立文化施設、文化協会をはじめとしたNPOが協働・連携して行く場、機会が必要です。しかし案外、制度化されていないと作れないところもあります。推進委員会に、公立文化施設運営者が参加することは謳われていますけど、本丸の委員会のところではなく、下部組織か分科会で担い手、実施主体が折々共同連携を図るために課題を共有する場を作るはどうかと考えました。

【大澤委員長】推進委員会はある種オーソライズの機関のように読めますけれど、実務をする人たちの連携が大事ですので、分科会、ワーキンググループなど実務レベルの推進体制が組織を超えて協働できる体制を作るというのは賛成です。

【水津委員】私たちは子どもの文化に特化して活動を推進していて、具体的に宮地楽器ホールと協働で進めています。そういうことがより保証されたいと思っています。どこかの形で明記できるといいです。それから、担い手、つなぎ手の人材を発掘、育成、育てるという表現が、上から目線に聞こえてしまう部分です。表現の問題なのかもしれませんが、いろんな関わり方があってそれを推進して行く、小金井の文化が豊かになることを目指して協働して行くという観点で記述してほしいです。

【大澤委員長】水津委員の指摘は重要ですね。今すでに取り組みされている協働などの形を、言葉や仕組みで定着させ、計画に位置づけて行ければいいと思いました。

【福沢委員】推進委員会の設置に関して、整理した方がいいところがあります。推進体制として、推進委員会の設置とありますけれども、ここは最初のフレーズでは推進委員会の役割を言っています。その次のフレーズでは構成のことを言っています。最初のフレーズとこの2番目のフレーズが入り組んでいます。最初のフレーズは役割、2番目はその構成のメンバーと書き分けた方がすっきりします。

【大澤委員長】福沢委員のご意見はその通です。事前に事務局と確認したポイントについてです。基本理念の部分は、現行計画の考え方をそのまま踏襲していくということですか。同じことを書いていてもしょうがない、抜本的に考え直さなければいけないというご意見はないですか。

次に、市からの意見です。推進委員会の設置の中で、評価に触れている部分があります。「また評価にあたっては、事業の実施状況や成果を通知評価だけで終わらせるのではなく」という部分について、もう少し踏み込んだ書き方があっていいのではないかといいものです。どうやって評価すればいいのか、市もすごく悩みどころです。しかも数値指標ではなく、定性的な評価は一体どうすればいいか分からないと評価ができないのではないかと、という意見です。委員長としては、先ほどの計画の内容と同

じように、評価についても書き込み過ぎない方がいいのではないかという判断で今このような形にしています。

【戸舘委員】書き込み過ぎないのが前提です。書き足すのであるなら、現計画の検討会議、委員会を昨年行い、定性的な評価をしました。あの進め方を書き足すことで、対応できるかもしれません。

【小林勉委員】このコロナ禍でスタートするにあたっては、通常の評価としては難しいのではないかという気がします。あまり強く書き過ぎずに進めればよいと思います。

【大澤委員長】今いただいたご意見で、考え方は共有できたと思います。最後の確認点です。この第2次計画のサブタイトル、副題です。「みんなの力で誰もが芸術文化を楽しむまちへ 協働・教育・包摂と芸術文化」という言葉でいいかどうか。この表題を見て「なるほど。小金井はこういう方向性なのだな」と思ってもらえるかどうか。

【戸舘委員】「みんなの力で」がイヤです。「誰もが」だけではダメですか。あと「力」ということばが強いですね。ちょっと「みんな」と「力」がつくのが（笑）。

【中原委員】「楽しむ」という部分が難しいですね。文化芸術は能動的に楽しむものと、受動的に楽しむものがあると思います。まち中で芸術に出会った時に、出会おうと思って探す人、たまたま道を歩いて出会う人、たまたま出会った後にそれをさらに楽しもうとする人、出会ったままそれで過ぎ去ってしまう人とグラデーションがあります。そうすると「誰もが芸術文化を楽しむまちへ」なのか「楽しめる」なのかは大きいです。さきほどの「10のキーワード」にも能動と受動というか、2つには分けられないでしょうが、グラデーションがあります。「楽しむ」だけだと、どっちにも取れてしまいます。たぶん能動の方をニュアンスとして強く感じる人の方が多いのではないかと個人的には思うのですが。

【伊藤委員】「みんな」で提案したのは、僕なのです。現行計画のタイトルが「誰もが芸術文化を楽しめるまちへ」です。「楽しめる」という言い方はいいと思うのですが、ことばが長くなってしまうので「楽しむ」でもいいかと思ったのですが、その時に「楽しむ」だと主体が見えて来ない。まちを作るのは誰かという意味で「市民の力で」というのを考えたのですが、「市民の力」というと市民ということばが強くなってしまうのもいかなものかと思い「みんな」に変えてしまったというのが背景にあります。いずれにせよ、「みんな」がいいか「市民」がいいか、それで市民1人1人が関わって努力をして、という言い方にすればいいんでしょうけれど、どんどん長くなりタイトルにならない。なるべく短いことばでと考えると、こうなったというのが実情です。「みんな」に代わることばで他にいいものがないのです。主体を入れたいという気持ちはあります。

【大澤委員長】ありがとうございます。いただいた意見の中で検討します。ニュアンスは分かります。「楽しむ」か「楽しむる」なのか、「みんな」なのか「誰もが」なのか、それぞれ微妙に色合いが変化していくので、事務局と市とで相談をします。

### 3. その他

#### 今後の進め方について（パブリックコメント等）

#### 意見交換等

【事務局・田中】12月4日、今週の金曜日いっぱいまでに、追加の意見があったら、メールで市役所までお送りください。短い期間で恐縮です。この後は、1月の頭からパブリックコメントの募集を市報等に掲載し、1カ月間意見を得る予定になっています。またそれにあわせて、オンラインの「小金井文化ラジオ」として、ご意見を集めるところがあり、ウェブサイト等で公開していきますので周知にご協力ください。

【大澤委員長】自由活発に意見をいただく形が最後です。ここまでやって来られて僕は嬉しいです。往々にして、市が事務局をやって、市の提案した通りに「うんうん」と言うガス抜きのような委員会も経験したことがありますが、そうではなく本当にみなさんが思ったことをいっていただき、思ったことを反映できたのではないかと思います。第10回の委員会をこれで閉めたいと思います。ありがとうございました。

— 了 —